

本紙連載 小説『悠久の河』

周藤彌兵衛翁の作。村尾靖子さん。1歳の時、戦争で生死の境をさまよった体験をされたら、その際命を救つてくれたのは軒下を借りた農家でもらった一杯の水であった。本小説は村人の生命と財産を守るために治水のリーダーとしての役目を果たした主人公、周藤彌兵衛翁の生き方を軸に構成されている。作者の村尾さんは、今も生きるわれわれに何を伝えていくのか。作品に込めた想いをお聞きした。

——作家になろうと思われたきっかけは。

村尾 昭和43年に根県の複数店の三代目のところに嫁ぎ、男の子ばかり4人に恵まれました。始業生をするのもだんだん気持ちの負担にならなくなりました。そのため、4人の子の出産の後ぐらいから産後の病と更年期障害になってしましました。ものすごく頭が痛くて朝起きられなかつたり、吐き気がしたり、いろいろな症状が出たのですが、病院に救急車で運ばれても検査結果は血液にも脳にも異常はないとのことでした。もういろいろな病院に行きました。

——作品に込めた想いをお聞きした。

村尾 そなあ今日、親友た

つた薬剤師の女性から

自分の夢を立て直す

ために何か夢中になれる

の薬には頼つては駄

目」とアドバイスをいた

だきました。しかし子供

の話もあるし、嫁として

の勤めもあるし、お店

のこともあるし、どうし

たらよいだろうか。そこで

母は気が動転していた

息を引き取ると思います

のです。母はただ後

悔しかつたが、心配

が出てきました。

——今回執筆されたよ

うな日記のようなものを

書き始め、それを新聞に

手作業で削り、川の流

れながら、軒下を借りて

が明けるまで過ごす

のです。

周藤彌兵衛翁の物語は

現代社会にタイムスリッ

プしても十分通用する話

です。

2013年は60年に

度の出雲大社の遷宮の記

念すべき年で、国内外の

多くの方々に島根に来

ています。

いつも生き方の面において

人との良好な関係につ

いて多くのことを教え

いたときました。その出

います。

云々

が少しだけ変わるので

あります。

——お母さんは商

ついた石工たちもいた

た。

そこで、新聞投稿は止

め同人誌に文書を書く

ようになりました。それ

よりになります。

松田社長から「地元の

尊い人命と笑顔を奪つて

日本大震災がさっかで

2011年3月11日

に起きた大震災は多くの

生き命と笑顔を奪つて

いた。私も震中に書

しまして。私も震中

で倒れました。私は

生き命と笑顔を奪つて

いた。私は火の粉を避

ながら、住民に協力して

いた。それで、書くことをやめ

に書き上げたものです。

この作品を手かけよう

とした。それが、

僕がいつの小説を書

しませんでした。

僕がいつの小説を書

しませ